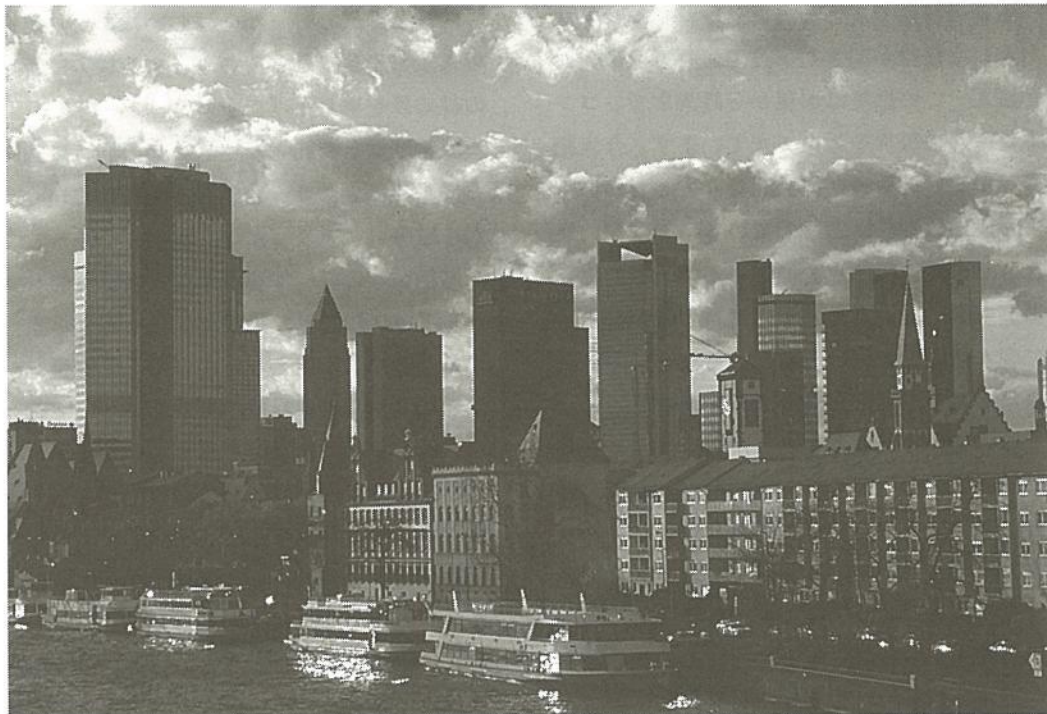


# アルパック ニュースレター

迎 春

平成7年元旦



メイン川からヴェストエントを望む — フランクフルトにて  
(本文中に関連記事があります)

アルパック ニュースレター もくじ

1995年1月1日

- あけましておめでとうございます…………… 2
- 統一ドイツにおける地区詳細計画事情…………… 6
- 柴刈り体験記…………… 8
- 「第4回日米草の根交流サミット大会」  
ウィリアムズバーグ大会に参加して……………10
- 話題の関西国際空港拝見……………11
- 伊賀豚ソーセージづくりに挑戦！……………12
- 都市公園と野宿者の共生……………14
- 新刊旧刊書評紹介……………15
- まちかど……………16

No.69

あけましておめでとうございます。

大変曲点を通過する・今こそ奉仕の精神

代表取締役会長 三輪 泰司

激動の時代です。一方でヘッジファンドなどという怪物が闊歩し一方で何百万もの人々が飢え、この惑星は環境から経済まで、コントロールの限界を越えてきています。今世紀末は予想外の事件が沢山起こりましたが、もっと劇的な変化が進行しているのではないかと感じます。変曲点を通過する時、どのような事が起こり、どのように対処するか、まさに我々の職能が問われる時代と思います。

コミュニケーションこそフロンティア

昨年を振り返りますと、京都では「平安建都1200年記念」のイベントで忙しい目に会いましたが、良いことが2つありました。

国際デザイン祭でピエール・カルダンなど外国の人々と、1200年記念式典懇親会では、天皇陛下ともお話しする機会があったこと。

ポスト1200年―百年後の京都創生を考える必要から、じっくりと書物を読むことができたことです。

おかげで、職能団体の運営からアルパックの経営まで、激動期乗り越えと、転換の指針を考えることができました。

奉仕の理想を求めて

今年、大役が待ち構えているのですが、改めて、平澤 興先生をはじめ多くの先達の教えを学び直し、このような時代こそ「ボランティア」が大きな意義と役割を担うことが判ってきました。限りない道ですが「奉仕」の精神こそが、人類の未来を導く道であると確信しています。皆様の益々のご健勝を祈念し併せて一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

質的飛躍の年に

代表取締役社長 金井 萬造

諸情勢の厳しい一年のはじめにあたり、日頃大変お世話になっております皆様方に新年の御挨拶を申し上げます。

昨年度は、委託者と地域社会の期待に答えていく為に、より一層の努力を傾けていくことを痛感いたしました。

本年は、この一年をよく反省し、質的なレベルアップに向けて飛躍の年にしたいと念じております。私個人としましても、21世紀の地域社会を支える組織のあり方について研究と実践をしていきたいと思っています。

昨年10月、日米草の根国際交流サミット大会において、米国の非営利団体（NPO）の活動を学び、日本からは地域活性化に向けたNPOの活動実践事例を報告しました。

21世紀に向けて、高齢化の進行、国際化と情報化の進展に合わせた地域サービスと地域に元気と活力をよみがえらせる為に、従来の行政組織と民間企業などに加えて、行政と地域（住民）、民間と地域（住民）のセクターの役割がさらに増大することが予想されます。

米国では、行政の役割と共に教会を中心とした教育、福祉、社会サービスの活動の歴史と実績があります。最近、特にNPOの組織づくりと相互連携が非常に活発化し、さらに地域の再活性化の分野にも活動の範囲を広げています。これらの現象はNPOの活動が時代のニーズと地域と人のコミュニティの条件により適合したものと判断されます。今年は特に日本型NPOの役割とあり方について研究を前進させたいと思っています。皆様の本年のますますの御健勝をお祈りしています。

今年もよろしくお願い致します。

## 建都1200年を通過して

京都事務所長 山口 繁雄

新年明けましておめでとうございます。  
昨年、京都では、『平安建都1200年記念事業』が多彩に展開されました。

100年前の『建都1100年記念事業』では、皆さんよく御存知のように、平安神宮を中心とする岡崎公園の整備が行われ、第4回内国勧業博覧会が開催されて、東京に遷都されたあと衰退しつつあった京都の活性化に一石を投じています。

今回の記念事業は、しばしばこの100年前の記念事業と比較されて論じられてきましたが、今回の特徴は、拠点地区の整備や博覧会のような一大事業を行わず、市内の各地で幾つかのプロジェクトを多様に推進するとともに、イベントも大規模単発型ではなく中小規模のものを年間を通じて連続的に開催するという方法を採用したところにありました。このため、やや地味な取り組みになったきらいがあります。

さて、今後の京都の活性化、今日では、京都だけが良くなればよいという時代ではなく、近隣の諸県や市町村と手を携えて、発展策を検討しなければならなくなってきました。「大阪湾ベイエリア」の開発整備が盛んになるにつれて、京都を始めとする内陸地域の活性化を如何に図るかが問われ始めているからです。

この変動期、事態の変化を冷静に見つめつつ、今年もより良い建築とまちづくりを求めて、所員一同頑張りたいと心を新たにしているところです。本年もどうかよろしく願い申し上げます。

## 「関西ブーム」の中で、元気な大阪づくり

大阪事務所長 杉原 五郎

関西国際空港が開港し、関西学研都市はセカンドステージに入りました。また大阪湾ベイエリアにも新しい動きがでてきました。最近、関西に視察で訪れる人々が増えています。「大阪学」（大谷晃一著）という本も売れているようです。いま、大阪では、ちょっとした「関西（KANSAI）」ブームです。

アジアに目を向けると、アジアの国々もたいへん活気を帯びています。私自身、ここ3年ほどの間に、韓国、台湾、シンガポール、マレーシアを訪れる機会がありました。道路や鉄道などのインフラ整備はたしかに遅れていると思いますが、物は溢れ、人々の表情には総じて明るさを感じました。中国やベトナムへの投資も相当加熱しつつあるようです。

関西（大阪）やアジアが元気になることは、いいことだと思います。問題は元気の中身です。95年は、元気の中身が問われる1年になるような気がします。

大阪事務所は、全社をリードする中核事務所として、業務、情報発信、社会活動などを活発に展開しています。「大阪に根を下ろす」というスローガンも、少しづつ実を結びつつあるように思います。アルパックセミナーや金曜ゼミさらにはまちづくりフォーラムなどを通じて、多くの方々との交流が深まり、ネットワークも広がりつつあります。研究会やボランティアなどに参加する所員も増えています。

95年は、ほんとうに元気な大阪づくりをめざして、所員一同思い切り頑張りたいと思います。引き続きご指導とご支援をよろしくお願い致します。

あけましておめでとうございます。

21世紀へのプロローグとなる年を期待

名古屋事務所長 尾関 利勝

あけましておめでとうございます。名古屋から新年のご挨拶を申し上げます。

20世紀も余すところ後6年、刻々と21世紀に近づき、私どもが関わる主要プロジェクトもこの頃に具体化を迎えるものが多く、勢い時代転換を意識せざるを得ない状況です。

昨秋、蒲郡市職員研修に同行、2年振りにアメリカ西海岸ウォーターフロントと再開視察に参りました。現地で共通して聞くキーワードは「バブルバースト」で、その主因は冷戦構造終焉による軍縮と日本の投資家撤退です。改めてボーダレスになった国際的環境を痛感します。今年は経済環境を時代とともに転換させる議論が益々活発になるでしょう。その話題をNHK大河ドラマ「八代将軍・吉宗」が提供してくれそうです。吉宗の緊縮政策と、一時江戸・京をしのぐと言われた賑わいを尾張にもたらした歌舞伎者「七代尾張藩主・宗春」の文化振興策を対比するまさに今日的テーマの時代劇です。吉宗には西田敏行、宗春には中井貴一が扮し、ジェームス三木による脚本が期待されます。

当地では今年が終戦と名古屋城本丸御殿焼失50年、来年は宗春生誕三百年、今世紀最後の2000年には尾張藩初代藩主義直生誕四百年、2005年には中部新国際空港開港と愛知万博が予定され、2010年には築城四百年が来るなど、時代の節目が連続します。

地球環境が議論される中で、自然と人工が親和した江戸期の環境システムが再評価されています。21世紀を間近にして、現代都市の母胎である城下町四百年の都市形成を振り返り、次世代へのプロローグとなる年にしたいと思います。今年もよろしくお祈りします。

距離感をいかに縮められるか

東京事務所長 小林 佑造

私達も東京の地で8年目を迎えます。この時期までひとかたならぬご指導・ご協力をいただき、新年のごあいさつとともにあらためて厚く御礼申し上げます。

昨年は福祉のまちづくりのなかで、二つの場面にぶつかりました。

その一つは、システムなり制度は新しい問題に対応することがなかなか出来ないということでした。人間というのは生身ですから、人間の集まる社会は常に新しい問題、課題を生み出してくるし、福祉の場合、後追い制度ですから、制度は出来た時からどんどん古くなるし、また、官僚化して横のつながりのない硬直化したものになっていき、双方の間に谷間みたいなものが出来てきています。

二つ目は、子ども、主婦、高齢者、障害者20人程での公園づくりのワークショップを進めた時、寝ころんで目をつぶり音を聞き、目隠ししながら歩き回り、ものを感じ、共同して物を探しながら多少ながら打ち解けて、共同して最後の公園の姿を形にしていく中で、多少の不満を持ちながらも一つの絵が出来上がっていく。「共生」の基本になるのは、それぞれの主体性の確立が絶対条件であることは勿論ですが、同時に価値観の違いを排除することでは決して成立しません。それを容認する、あるいは容認するという資質がなければ良好なコミュニティの成立もおぼつかないわけです。

権利要求型が多い中で、別々に見えるものをどうくっつけていけるのか、今年もまた難しい問題を抱えながら仕事に取り組んでいきたいと考えております。本年もよろしくご指導、ご協力をお願い申し上げます。

## 今年もよろしくお願い致します。

## 地域づくりのためのネットワークを

九州地域計画研究所副所長 山田 龍雄

明けましておめでとうございます。

福岡地域では昨年、昭和53年の大洪水時期を上回る小雨の年となり、8月より給水制限の日々が続いています。現在は15時間給水(a.m. 7:00~p.m. 11:00)のため日常生活にはさして影響はありませんが、歓楽街中州への足は少し遠のくようであります。今年の夏場までこの状態が続くようであれば、大変なことになります、今年は是非とも雨が降ってくれることを願うものです。このような日照り続きの中

で所員一同頑張っていますが、九州では日常的な情報受信または発信活動を目標に次のようなことを行っています。

①機関誌「よかねっと」発行(なんとか13号までたどりついた。)

②地域ゼミ(平成4年まで途絶えてたのを今年から復活再開、昨年8回開催。)

③よかねっとパーティ(別名「うまいものパーティ」シリーズ化しそうな気配。)

今後ともフットワーク軽くこのような活動を続け、地域づくりのための“ネットワーク”に役立てばと思っています。

本年もよろしくお願い申し上げます。

## チャレンジする精神を

㈱アルバイターナショナル 代表 霜田 稔

あげましておめでとうございます。

AI Iは、昨年から関西文化学術研究都市の第2ステージの試案づくりのお手伝いを始めています。学研都市も構想期、計画期を経て、建設開始期、そして今、2,000人を越える研究者と60を越える研究機関の集積が進みつつありますが、R&Dのグローバルな展開の中で、本格的な知的創造都市に向けて新しい目標とそのプログラムの構築や実行が期待されています。このためには、いままでの大学、企業、行政の連携の枠をこえて、ダイナミックなシステムの構築が不可欠になってき

ているのではないのでしょうか。

日本の産業も、そして私達のようなコンサルタントもシンクタンクでも、未来に挑戦するコンセプトのもとに企業の枠を越えたコンソーシアムやアソシエーションが必要になるのではないかと予感させます。共通のコンセプトのもとに挑戦する精神、これが、これからの時代精神だと思います。

足元の地味な仕事をしながら、コーディネーションの力をつけ、さらにインターナショナルな仕事も出来るグループに発展させていきたいと執念を燃やしつつ、今年も頑張っていきたいと思っています。どうぞ宜しく、御指導下さいませようお願い致します。

## ストックの活用と地域活性化

都市居住文化研究所 代表 道家駿太郎

21世紀へ後5年、新しい時代への展望の中でフローからストックへの転換による豊かさを実感される時代に入ってきたことを感じています。

京都の「平安建都1200年記念」事業は取り立てて大投資をする事も在りませんでした

社寺のライトアップや特別公開、また多くの市民が各々の団体を通じてイベントを繰り広げるやり方で人材を含めた京都のストックを活性化し、大変な活況を呈しました。

私も世界からデザイナーの集う「京都国際デザイン祭」の事務総長を勤めましたが、世界や日本各地から快くこのイベントに参加して頂き、素人にもこれだけの事業ができる京都の歴史や町・人のストックを改めて実感い

たしました。

本年は(社)新日本建築家協会の理事を勤めますが、建築家・プランナーの職能の向上と共に全国の建築家の方々にも地域のストック

に目を向けて頂けるよう努力したいと考えております。本年も一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

## 統一ドイツにおける地区詳細計画事情

坂井 信行

先般、全国地区計画推進協議会の企画によるまちづくり海外研修に参加し、ヨーロッパにおける地区レベルでの計画制度とその運用に関する視察を行いました(団長は大阪大学の鳴海先生)。欧米諸国の都市計画制度については日本でも研究が盛んで、ドイツの地区詳細計画制度は特に有名です。そこで、以下では新たな制度が導入された統一後のドイツにおける地区詳細計画について紹介したいと思います。

### 東西ドイツの統一とVプラン制度の創設

従来、旧西ドイツの土地利用は、都市全体の基本方向を示すマスタープランであるFプラン<sup>1)</sup>と、それに基づく地区レベルの詳細計画であるBプラン<sup>2)</sup>の二層制の計画制度によってコントロールされてきました。1990年、東西ドイツが統一されたことにより、旧東ドイツ地域においてもこれらの制度が適用されることになりました。

Fプランは自治体内部での計画であり、個人に対する法的な拘束力を持たないのに対し、Bプランは個々の敷地における建築許可の判

断基準となるため、個人の権利の制限を伴います。従って、Bプランを定めるためには高度なプランニング能力と多くの時間(通常2年以上)が要求されます。しかしながら、統一直後の旧東ドイツ地域の自治体にとって、Bプランは未知のものであり、計画策定に向けての体制も十分とはいえないため、Bプラン制度をそのまま導入するには困難が予想されました。そこでBプランに代わるものとして、開発者の能力を活用しつつ計画を定めるVプラン<sup>3)</sup>制度が新たに創設されました。

旧東ドイツ地域を対象として創設されたVプラン制度は、1993年に若干の修正が加えられ、現在はドイツ全土に適用が拡大されています。

### 企画提案型のVプラン

Vプランは、民間開発者からの企画の提案をもとに、自治体と開発者の協議を通じて定められます(策定プロセスのイメージは日本の再開発地区計画に近い)。このため、Bプランに比べて計画策定にかかる自治体の時間的、経済的な負担は大幅に軽減されます。



開発ラッシュの旧東ドイツ地域  
(ベルリン)



豊かな緑に包まれた住宅地  
(フランクフルト)



歴史的なまちなみが再整備された  
ゲート広場（フランクフルト）

計画の内容としては、Bプランと同様に用途、容積率、階数、壁面の位置、屋根の形状など建築物の規制に関する項目や道路、公園、駐車場など基盤施設に関する項目等について非常に細かく定められ、1/500~1/1000程度の図面に表示されます。

Bプランは、計画実現のために建築命令を出せるとされているものの、原則的にはすぐに計画が実現されるとは限りません。これに対してVプランでは、自治体と開発者の間で開発費用や建築の実施に関する契約が結ばれるため、開発者には建築の実施が義務づけられます。さらに、一定期間の内に建築が実施されない場合、自治体は計画を無効にすることが可能とされています。

#### 開発・建築行為に対する計画的規制

開発や建築に対しては、BプランあるいはVプランに適合していることが許可の条件となります。しかしながら、当然全ての地区でBプランやVプランが策定されているわけではなく、また制度の導入（1960年）以前に市街化された地区も多くあるため、これらの地区については別途、都市計画的な規制が行われます。

地区詳細計画が定められていない場合、その地区が建設法典第34条に規定され



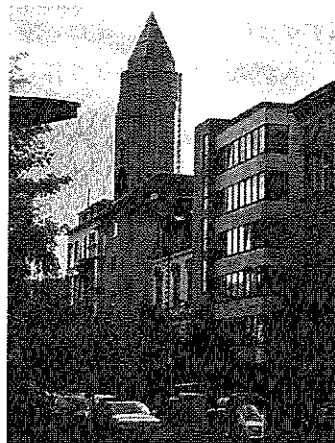
住宅地では壁面位置や屋根勾配までBプランに定められる（ダルムシュタット）

る連担市街地かどうかがまず判断されます。一定のまとまりのある市街地、すなわち連担市街地と認められる場合、関連計画や周辺環境、あるいは基盤条件などに適合する場合に限って建築が許可されます。また、連担市街地と認められない場合には、原則として開発や建築は制限されます。

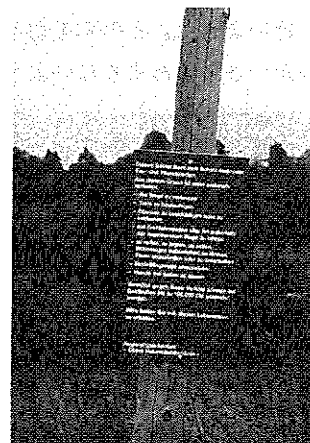
#### 地区詳細計画制度の運用の実際

フランクフルト郊外のダルムシュタットでは、現地在住のプランナー春日井道彦氏にBプランのいくつかの事例について案内していただきました。

春日井氏の自邸のある閑静なニュータウンでは、建築物に関する項目以外に保存すべき樹木の位置や樹種までがこと細かくBプランに定められています。また、宅地のすぐ裏では開発以前の自然のままの状態がビオトープとして保存されていました。もっとも、日本なら虫や蛇など問題になるかもしれません。



ヴェストエント地区ではオフィスの侵食から住宅地をまもるためBプランが策定された（フランクフルト）



ビオトープ保護のため自然破壊を警告する看板（ダルムシュタット）



Bプランでは個人の敷地における建築の自由を大きく制限しているケースが多く、日本における建築・計画行政の実情を少しなりとも知る者としては戸惑うばかりです。しかし、建築されている建物を見る限りでは、規制の運用はかなり柔軟に行われているように感じました。実際、2階以上の建築が禁止されている敷地に“地下室”と“屋根裏部屋”を設

えた実質3階の“平屋住宅”が建築されているのを見つけたとき、なぜかほっとしたのです。

(大阪事務所 さかい のぶゆき)

- 1) Flächennutzungsplan  
(土地利用計画)
- 2) Bebauungsplan  
(地区詳細計画)
- 3) Vorhaben und Erschließungsplan  
(建築及び地区整備計画)

## 柴 刈 り 体 験 記

原田 弘之

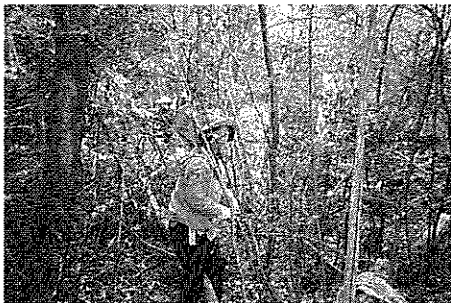
「おじいさんは山へ柴刈りへ、おばあさんは川へ・・・」、深まる秋の日、柴刈りを体験してきました。1994年11月5日、兵庫県氷上郡柏原町の丹波悠遊の森で、「こころ豊かな兵庫づくり推進協議会」の主催です。参加動機は、田舎の風景へのあこがれや休日や緑の中で過ごしたいという想いの他に、日常業務の中で、里山保全や環境保全という言葉が頻りに使いつつも、実践したことがないという劣等感が少しあったからです。

### 気持ちのよい柴刈り体験

参加者は28人、婦人グループをはじめ、子連れのファミリー、若者グループなど、多くは神戸方面から車でやってきた人です。午前中は事業の説明を受けてから、林の中(民有地)に出かけ、約1時間半の間、枝打ちや間伐を行いました。どの木を切るか残すかという細かい基準はあまりないようで、「人が入

って気持ちのいい林になるように」あるいは「生き物が来るように実のなる木は残して」といったものでした。最初は戸惑ったものの、太い木を残しながら、おおよそ同じ密度になるように刈っていきました。切った木は集めて束ねます。素人はひもで束ねることを考えますが、地元の農業者の方はある種の木(枝)をねじり、柔らかく、かつ強度を増した上で、それをひも代わりに使う伝統的な“技”を披露してくれました。

地元の新鮮な野菜を材料としたバーベキューの昼食をごちそうになって、午後からは里山観察会と椎茸菌体験打ち込みを行いました。観察会は植物園の専門家の方に指導を受けながらのものでしたが、1m進む間にも様々な種類の草木や花があることに気づかされました。また、婦人のグループなど参加者の中にもかなり詳しい方がおられ、椎茸菌を打ち込

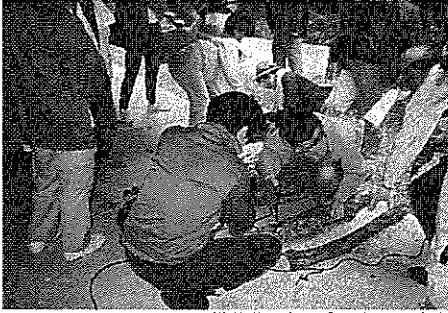


林の中で柴刈りにいそしむ

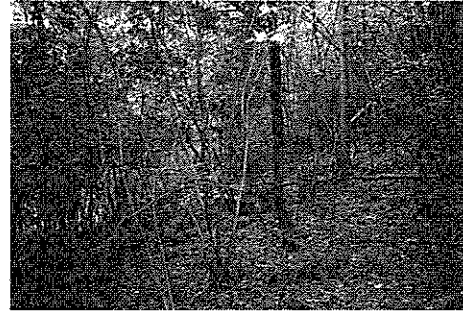


柴刈り後、おいしかったバーベキュー





椎茸密を打ち込むための穴をドリルであける



気持ちよさそうなクヌギ、コナラ林

んだ杭を持って帰られるぐらいで、市民の中でリーダー候補の人材のポテンシャルを感じました。

今回の作業の中で一番強く感じたことは、樹木や生き物など自然全般について知らないということであり、里山管理の作業に興味をもって続けるためにも、自分で学習することとともに、情報提供してくれる人材や媒体の必要性を感じました。

#### 里山に関わる問題

「里山」とは農山村地域において、生活資材の自給（薪や炭）や農業生産（堆肥用の落葉）を目的として、人の手によってつくられた林地で、植生的にはクヌギ、コナラなどの二次林からなっています。林の中は花が咲き、果実がなり、多様な昆虫や動物のすみかです。また、花木の鑑賞や果実とり、昆虫採集など子供の遊びの場でもありました。このような里山は、伐採や間伐、下草刈りといった人の手による維持管理が必要で、それなしには元の荒れた自然林にもどってしまいます。

数十年ほど前から、農村における石油やガス燃料、化学肥料の普及、さらに農業の機械化・兼業化に伴って、里山の利用は減少し、多くは適正な管理もされずに放置されるようになりました。一方、都市化の進展に伴って、住宅地やゴルフ場へと姿を変えてゆきつつあります。

このような里山にかかわる問題を背景とし

て、ここ数年来、全国で里山トラストや維持管理等のボランティア活動が市民団体などを中心に展開されてきました。今回は公的な団体が主催しはじめたという意味で、里山保全の問題も新しい段階に入ったように感じます。里山の保全・活用に寄せる期待

昔の農村のくらしと密着していた上で「里山」があった訳で、くらし自体が変わってしまえば、「里山」を全部残すということは不可能でしょう。農業的に利用されている部分は残しながら、自然の遷移に任せる部分と、現代のくらしに活用できる部分（レクリエーションや環境学習等）を分けけた上で、その保全と活用を図っていくことが望まれます。今回の取り組みは、「里山」を見つめ直すきっかけづくりという意味で評価されますが、今後はレクリエーション資源や環境学習資源としての積極的な活用が重要になってくるでしょう。そういう取り組みの中で、農業者は技術的な指導者として、また知識をもった市民は情報提供者として活躍するという方向性が描けるのではないのでしょうか。

都市民の中には、参加費用が昼食代程度で、日帰り圏の範囲ならば、気持ちのいい自然の中で学びながら作業をしたいという人は結構多いのではないのでしょうか。今後、こうした取り組みが増えていくことを期待します。

（大阪事務所 はらだ ひろゆき）

「第4回日米草の根交流サミット大会」  
ウィリアムズバーグ大会に参加して  
小竹 暢隆

昨年10月にアメリカのバージニア州ウィリアムズバーグで開催された第4回日米草の根交流サミット大会に参加した。本大会は毎年日米交互に開催されることになっており、メイン開催地は、第1回京都(1991年)、第2回ボストン、第3回名古屋に続くものである。  
**歴史的都市ウィリアムズバーグ**

今回のウィリアムズバーグ大会は、日米草の根交流サミット大会実行委員会、(財)ジョン万次郎ホィットフィールド記念国際草の根交流センター、The Manjiro Society for International Exchange Inc. の共催で行われた。

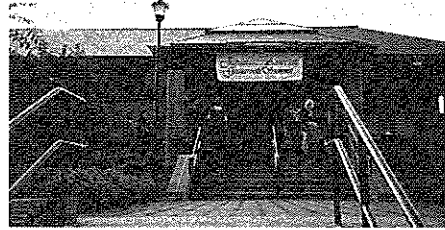
ウィリアムズバーグは人口約1万人の町で、1699年から1780年までの81年間、バージニア植民地の首都であった。ロックフェラー財団が管理する植民地時代の景観を復元したコロニアル・ウィリアムズバーグは、国立歴史公園の一部となっている。

メイン会場となったウィリアム&メアリー大学は1693年に設立されたアメリカで2番目に古い大学で、今回は大学側の好意により会場を無料で提供してもらった。

参加者総数は500人、内訳は日本側200人(日本からの参加150人、在米日本人50人)、米国側300人であり、ビジネスマン、公務員、教育関係者、郵便関係者、伝統芸能関係者、農業関係者、主婦、学生、シルバー市民、マスコミ関係者等、多様な顔ぶれであった。草の根交流ということで、運営もボランティア中心である。

**地域性、独自性等様々な分科会テーマ**

「街並保存」、「シルバー市民」、「暴力



会場のウィリアム&メアリー大学  
ユニバーシティセンター



コロニアル・ウィリアムズバーグの  
一光景

- ・犯罪・銃と社会」など身近で地域性を取り入れたものや、「非営利団体(NPO: Non Profit Organization)」、「マルチメディア」、「日本語教育」など財団独自のものも設定された。
- ・非営利団体 21世紀型社会組織としてのNPOに注目し、日本福祉大学丸山優助教授を中心に研究会を開催し、議論を深めてきた。
- ・マルチメディア 国際交流における情報技術の活用について早くから注目し、昨年5月から研究会を開催してきた。加えてサミット大会期間をはさんでインターネットを通じて情報発信の実験を試みており、世界約30か国から既に6万件以上のアクセスがあった。
- ・日本語教育 初中等教育関係者や私塾の教師を対象に、昭和女子大学高見沢教授によるワークショップを行った。
- ・職能交流 第3回名古屋大会に始まった郵便関係者の交流は、地域社会に密着した職能の視点から今後も継続していくテーマである。
- ・ホームステイ 海外に縁のなかった企業幹部や、地域社会のリーダーにも光を当てた社

会人ホームステイである。ウィリアムズバーグのリタイアした人々のコミュニティがホストファミリーとして受け入れてくれた。

### 継続する大会・交流へ発展

今回のサミットでは名古屋大会でのホストファミリーを含む多くの継続参加者があったこと、次回開催予定地の鹿児島県より地域伝統芸能の演奏者を含む多数の参加があったこと、姉妹都市交流など各機関、団体独自事業を特別分科会としてサミット大会に積極的に組み込まれたことなどが特筆できる。また夫婦や家族単位での参加者が多かったことも特徴として挙げられる。

今年の第5回は鹿児島において10月31日から11月4日までの会期で開催されることになっており、地元では受け入れ準備が進められている。こうした意義ある交流がさらに発展していくことを期待したい。

(名古屋事務所 おだけ のぶたか)

## 話題の関西国際空港拝見

松木 一恭

秋風が吹く頃、所内旅行として関西国際空港へ行って来た。空港への連絡橋にさしかかると、羽を休めている鳳のようなターミナルビルが見え出す。そして島の上に浮かんで見えるそのビルが、しだいに近づくにつれ、人がなにかに横たわっているようにさえ見え

出してくる。

ターミナルビルは、全長約 1,700mで4階建である。1階は国際線到着フロアー、2階は国内線出発・到着フロアー、3階はコンセッションフロアー、そして、4階は国際線出発フロアーとして構成され、わかりやすい動線となっている。建物の内部空間は、主に大きく3つにわけられている。

まずは、チェックインする前を通るキャニオン（吹抜け空間）＝「樹木とガラスで構成された空間」、2つめは、チェックインロビー＝「空と風をイメージした空間」そして、3つめは、ゲートラウンジとしてのウィング＝「黄色いイスとガラスのカーテンウォールで構成された空間であり、国際線発着ゲートへ行くためのウィングシャトル（無人列車）の駅がある空間」である。外部空間は、軽快で有機的な機械建築と感じられたが、内部空間は、その軽快さを一層強め、より人間的に一体的に空間が構成されているように思われる。それは、ディテールの細かさ、また、そのディテールをある一定の寸法間隔で繰り返しかっている構築物であり、空間に特色を持たせながら、空間を自然的に分割しているからであろう。あくまでも、細かいサインでの誘導ではなく、その自然な感覚で、人を誘導しているすばらしい空間構成であると思う。

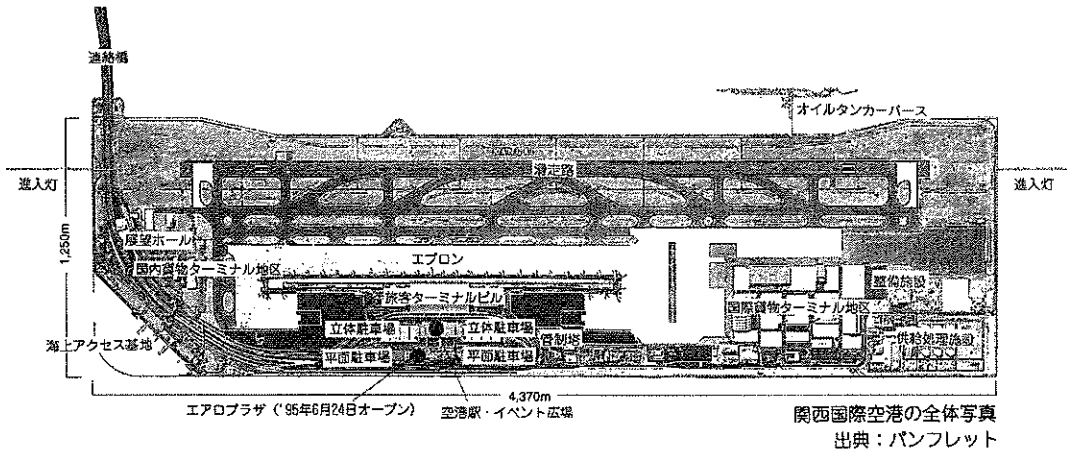
このようなすぐれた建築物でも、いろいろな難点や課題が心配された。



見学者でにぎわう展望ホールからの空港全景



滑走路からのターミナルとバツタ



- コンペ時に見られた植樹が多く削除されている。
  - 国際線の出発ロビーからは、直接滑走路が見えない。
  - ターミナルビルと他のビル群の調和。
  - 滑走路内のバッタの大量発生、芝生の枯れ。空港は植樹が少なく、鳥虫があんまりないので、天敵のいない滑走路で大量のバッタが楽しそうに飛び跳ねている。
  - 4年後には止まるであろうといわれている地盤沈下と段差処理。
- ただ、このような課題は、目に見える範囲であり、技術の向上とともに処理されると思われる。しかし、今後目に見えにくい海中の変化、自然の変化も考えねばならない。

(京都事務所 まつき かずやす)

伊賀豚ソーセージづくりに挑戦！  
吉村 礼子

去る10月21日、大阪事務所の所内旅行があった。ずっと秋晴れが続いていた中、その日に限って雨だった。行先は三重県の伊賀にある「手作りハム工房モクモク」。農業組合法人伊賀銘柄豚振興組合の施設で、地元で研究開発され、農家で飼育されている特産の伊賀山麓豚 100%を原料としてハム、ソーセージ

を製造している。おいしくて安全なハムをモットーとして、製品は無添加や必要最小限の添加物で消費者にはうれしい限りである。しかもそのソーセージが食べられるだけでなく、何と私たちにも作れるということで、「手づくりウィンナー教室」を体験しにやってきたのだ。

まずは腹ごしらえ

モクモクでは野外パーベキューもやっている、昼食はここでとることになった。もちろん肉は伊賀豚、その他に色々なモクモクのハム、ソーセージが食べられる。私は、あまりお腹は減っていなかったのだが、いざパーベキューが始まると…おいしい！豚肉なのに臭みがなくあっさりしているので食べるわ食べるわ。あっという間に肉がなくなってしまった。灰汁と臭みのないこのうまさの秘密は、伊賀豚の餌に混合している「森林酢(木酢酸)」(食酢の30倍余りの働きをもつ)にあるとのことで、みんなたらふく食べてしまった。



ドロンコ遊び状態？  
ミンチと調味料のかき混ぜ作業



グロテスクな材料と格闘の末、  
ようやくソーセージらしい姿に

### ソーセージづくりに挑戦

ウイナー教室はメインの大きなログハウスの中で行われる。戸惑いながら、手を消毒しエプロンを着けて待機する。会社での姿とは違って、初めて見るオジサマ方のエプロン姿に違和感を感じながらもミョーに似合っていたりしておもしろい。

作り方の説明が始まった。マイクで指導してくださる先生の話し方がユーモアがあってとてもわかりやすい。ソーセージづくりは、まず、伊賀豚の赤身のミンチと細かく砕いた氷を混ぜるところから始まる。あまりの冷たさに手を止めてしまうので、なかなかうまく混ざらない。手を真っ赤にしながらい脂身のミンチと調味料を混ぜる。必死になって混ぜるので、みんなこの時点でミンチまみれである。ようやく混ぜ終わると今度は腸詰めの作業だ。ピストル型の器具に羊の腸の袋をはめ込み、材料をカッチカッチと押し出しながら袋に詰め込んでいく。これがまた難しい。肉の量が多ければ袋が破けるし、少なければへニョヘニョになってしまう。作業にはみんなの性格が表れて、破れまくっている人や、意外と器用にこなす人がいたりしておもしろい。ほとんどドロンコ遊びのような感覚で童心にかえったように夢中になってしまい、あっという間に終わってしまった。

私達の教室は「ボイルコース」だったので、作り終えたウイナーはゆでてもらった。お店で買う物と見た目が違うが、試食をさせて



ボイル作業、あとはできあがり待つだけ

もらうとプリプリしてGood!これは人気があるはずだと納得してしまう。ゆで上がったウイナーはお土産になる。

この他に「スモークコース」もあり、そこらは特製スモークドラム缶で桜チップを使ってスモークしてくれるそうだ。

この日は、私達の他にも同じような社員旅行らしき団体や、家族連れもきており、なかなかの盛況ぶりだった。

### 完成が待ち遠しい「モクモク手づくりファーム」

モクモクの運営は「伊賀銘柄豚振興組合」で、地元の農家のパートとモクモクの従業員で行われている。また、現在このモクモクでは、同敷地内に自然・農業・豚をテーマにした「モクモク手づくりファーム」を建設中で、今年の7月にオープンが予定されている。

「焼き豚館」と「地域特産物直売館」は既に完成しているが、今後も色々な施設ができる予定で、その中の一つに伊賀産の麦からビールを造るという「地ビール工房」もあるそうだ。完成したら、また行ってみようかと思う。

(大阪事務所 よしむら れいこ)



隣接する「地域特産物直売館」外観

# 都市公園と野宿者の共生

馬場 正哲

大阪あいりん地区のありむら潜氏から、「センターだより第220号-都市公園と野宿者について考える」とそれを読んだ「プロの野宿者の投書」が送られて来ました。ありむら氏は(財)西成労働福祉センターに勤務され、広報紙「センターだより」を担当するうちに、その4コマ漫画「カマヤん」が大ヒットした漫画家でもあります。

不況が長期化する中で、日本一の日雇労働者のまちでも野宿の問題が深刻です。緑のある都市公園や道路は、野宿者の、また一般市民の双方にとって貴重な場所ですが、天王寺公園のように野宿者がしめだされるケースまでできています。

昨年、ホームレス大国のアメリカでこの分野の専門家であるカリフォルニア大学ランディ・フェスター教授が招かれ、その野宿者と都市公園との共生についての講演内容がセンターだよりに紹介されています。

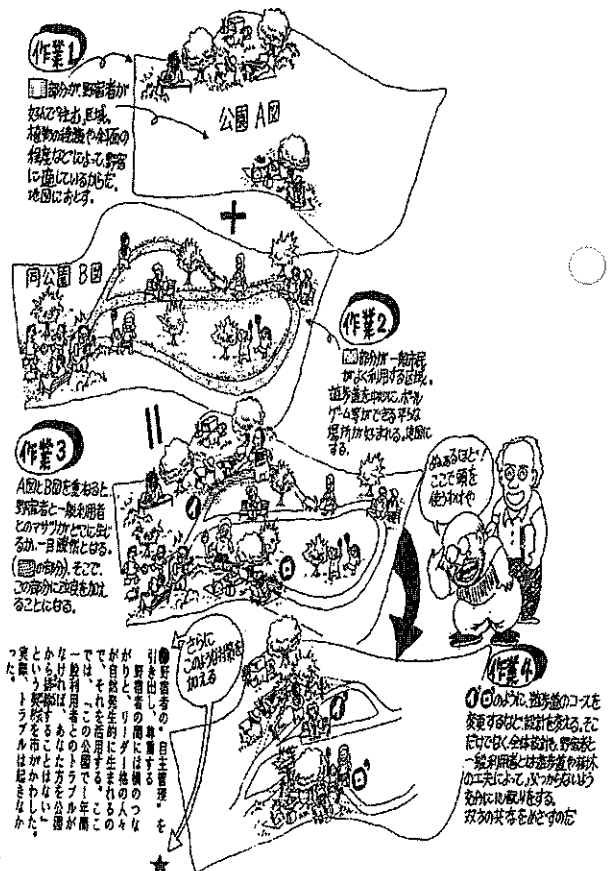
要約すると、野宿はアブレの結果であり、対策は雇用の確保や住宅・宿泊施設の提供などが基本で、そのための関係機関の努力が求められている。しかし、野宿者の意識・要求は実に多様で、現代では公園に野宿者が住み着くことは避けられない。これを閉め出す公園づくりは全て失敗している。従って、一般利用者と野宿者が共存できる公園づくりを勧めている。そして、氏の手がけたハリウッド市のラニオン・キャニオン公園の例がありむら氏のイラスト(右図)で紹介されています。要は、住み分けの配慮と野宿者の「自主管理」及び周辺住民



との「相互理解」をつくりあげることだと思います。

この提案に日本のプロの野宿者氏は納得とともに、最近の野宿者の変化(①高齢化②土建業以外のドロップアウトの増加③教養人の増加)を指摘。絵の中で、木の背もたれなしのベンチ(高さ20cm程度)が寝心地良さそう。人も三~四人と二人と独りに分かれる。ベンチの配置はランダムに。一般人の通路が90度に曲がると急に変な人が見えたらビックリする。夜はアベックと野宿者が重複するので寝にくいベンチとかで分ける。ドロップアウト組は人間嫌いで、子供に配慮がいる。日本の場合、自主管理は難しく、案外上の人が声を掛るなど日本独自の思考をお願いしたい。等々新鮮な意見が述べられています。何事も生活者の視点が重要かと思ひ知らされます。

(大阪事務所 ばば まさあき)



## 新刊旧刊書評紹介

ロバート・K・G・テンプル著 河出書房新社

## 『図説 中国の科学と文明』

紹介 重本 幸彦

## 中国は発明・発見の一大文明の地

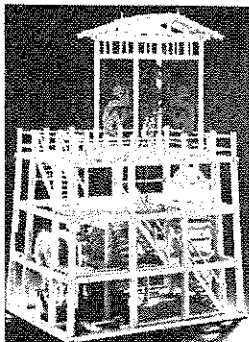
本書は言う—「おそらく『現代社会』を支えている基礎的な発明・発見の半分以上が、中国に由来するだろう」。

ヨーロッパのルネサンスの三大発明—印刷術・火薬・羅針盤が、いずれもその数百年以上前の中国での発明であることは、今の高校の世界史の教科書などには述べられているが、その記述は簡単で、うっかりすると例外的なことがらという印象を受ける。

しかし、実際はそんな生やさしいことではない。本書では、今までヨーロッパの発明・発見とみられていた 100に及ぶ事例を調べ上げ、その起源や先行が中国にあることを解明している。その一端を紹介する。

中国では紀元前から「深耕と畝(うね)」や牛馬にひかせた「鉄製犁(すき)」が実用化されていたが、これらがヨーロッパに伝わったのは17~18世紀で、農業革命をもたらした。

8世紀の中国では、機械時計(天文器械、写真参照)が作られていた。その原理がヨーロッパに広がったのは、数世紀後である。従来はインドといわれてきたゼロの案出も、紀元前4世紀の中国にまでさかのぼれる。



中国の天文時計(1092年)の復元模型

その他、血液循環(中国=紀元前2世紀:ヨーロッパ=17世紀)、十進法(同じく紀元前14世紀:10世紀)、水力の工業的利用(同じく1世紀:12世紀)等々であ

る。もちろん、これらが中国からヨーロッパへ伝えられたという証拠は、必ずしも全てについては定かでない。しかし、古代から中世への中国が、一般に想像されるより、はるかに高い水準の“科学技術の国”だったことは、まちがいないようだ。

## 東西文明論に新境地を広く

本書は、イギリスのJ. ニーダム博士(94歳)が執筆・刊行中の大著『中国の科学と文明』の一般向け要約書として、先取りのに出されたものだが、淡々と事実を積み重ねつつ、多数の写真や図版により、この本を読み終えた読者をしてヨーロッパ中心の科学技術史観の誤りに気づかせるだろう。アジアの産業経済的台頭の中でのこの本の登場は、何か示唆的である。

また、本書は、東西文明が対照的な面を持つと同時に、その根っ子の部分で交流しつながっていることを示したともいえよう。

(大阪事務所 しげもと さちひこ)

編集局より

前号(68号)で但東町の字が間違っておりました。訂正とお詫びを申し上げます。





## まちかど

### 大阪のストリートミュージシャン達

中川 天晃

皆さん、「しろてん」をご存知ですか？  
(オデンの具ではありませんよ)

この「しろてん」とは、大阪城と4～5年前にはやったアマチュアバンド出演TV番組、いかすバンド天国「イカテン」をもじった合成語と思われ、大阪城公園を根城に活動するアマチュアバンド演奏、または、その場所を指すようです。(これも定かではありませんが・・・)

「しろてん」の場合は、多くは10代の若人が日中にその活動を繰り返しているようで、オーディエンスも中高生が中心です。

音楽傾向は激しいモノ系中心で、その音量も並大抵ではなく我が大阪事務所にまで轟くほどであります。内容については「ちっ、まだまだアオイゼ！」と私などは思っています。

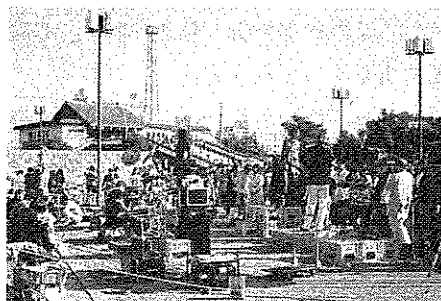
方や夜のミュージシャン達の中でひととき異彩を放つのがナビオ阪急周辺のジャズ系ミュージシャンです。残念ながら写真に収められませんでした。トリオで活動しているようで「まいった」と思ふかなりの内容でありました。

最近はかなり本格的なワザとセンスを持ったパフォーマー達が東京を中心に活躍してい

ると噂に聞いておりますが、その波が大阪にも押し寄せていると感じさせてくれるものであったと感心した次第であります。

(大阪事務所 なかがわ てんこう)

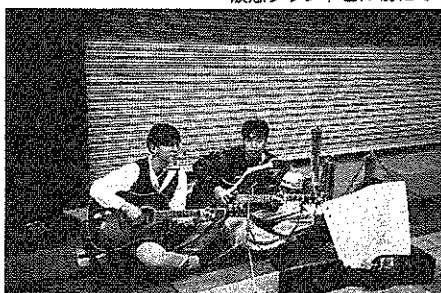
「しろてん」の青いミュージシャン達へ、おたおたしていると淘汰されちゃうよ！



大音量で演奏する「しろてん」の若モノ大阪城公園にて



一人で頑張っているが…阪急グランドビル前にて



座ったままではまだまだ青い阪急東通商店街にて

## アルパック (株)地域計画建築研究所

- 本社
- 京都事務所 〒600京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075) 221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06) 942-5732 FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所 〒460名古屋市中区丸の内3-18-30・ツボウチビル2F/TEL(052)962-1224 FAX(052)962-1225
- 東京事務所 〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- (株)九州地域計画研究所 〒810福岡市中央区天神1-15-1・日之出ビル6F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673
- (株)アルパックインターナショナル 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)965-2012 FAX(06)965-2014
- (株)都市居住文化研究所 〒604京都市中京区東洞院通り六角上ル三文字町225・朝陽ビル4F/TEL(075)252-2231 FAX(075)252-4417